

リンコ・ツジムラの成長物語(2)：

ヨシコ・ウチダの『悪いことが良いことに』と『最も幸福な結末』

渡 辺 佳 余 子

日系二世のアメリカ文学作家、ヨシコ・ウチダ（内田淑子、1921－1992）は、29冊の児童文学書、4冊の大人向け作品を出している。これらの作品群の中では、11歳の日系二世少女 Rinko Tsujimura の一人称語りで、アメリカに生きる日本人や日系人の姿が生き生きと描かれる、リンコものと呼べる三つの作品が特に優れていることは、三作品ともに文学賞を受賞したり、一作品がテレビ映画化されたりしていることにも示されている。¹⁾

リンコ三部作に描かれる時代は1930年代半ばであるため、強制収容所での体験に関する逸話は語られていない。このことが、日系の作家が語らなければいけないと言われている「収容所送還」という歴史的事実から自由になることができ、これらの作品に伸び伸びとした空間が生まれている。従って、読者は、少女リンコが語る素直で率直な世界に引きこまれ、魅了される。一方で、これらの青少年読者層を対象としているリンコものにも、日系少女リンコに常につきまとう「人種差別」という重いテーマが描かれていて、これらの作品が大人にとっても読み応えのあるものになっている。

本稿では、このリンコ三部作のうち、第2作目の *The Best Bad Thing* (1983) 『悪いことが良いことに』（以後、『良いことに』と記す）と第3作目の *The Happiest Ending* (1985) 『最も幸福な結末』（『結末』と記す）を取り上げ、第1作の *A Jar of Dreams* (1981) 『夢をかなえる壺』（『壺』と記す）からさらに成長したリンコの姿を追う。第1作『壺』で、リンコの成長を強く助けた人物は、リンコの母の妹、ワカであった。アメリカを訪れた、日本在住のワカはリンコの生きた時代には珍しいタイプの自立した女性であった。ワカの助言でツジムラ一家は、差別するアメリカ白人と正面から対立する勇氣を持てるようになる。そして、リンコも、家族の誰にも言えなかった、学校でいじめられているという事実をワカには告白することができる。リンコはさらに、ワカに勇氣を与えられて、いじめにも立ち向かっていこうという前向きな姿勢が持てるようになる。

第2作『良いことに』で、ワカのような役割を果たす人物は、リンコの母と同じように写真花嫁として太平洋を単身渡ってきたハタおばさんである。第3作『結末』では、このハタおばさんが、日本の両親に養育を依頼して、幼いときに日本に送った長女テルである。ウチダがこのような少女リンコが大きく成長する際に必ず重要な役割を果たす女性を登場させていることに注目しながら、リンコもの三部作におけるリンコの成長が一応の完結を見る過程を分析したい。その上で、作者ウチダが読者に伝えようとしたメッセージの意味を探りたい。

I. *The Best Bad Thing* (1983) 『悪いことが良いことに』

カリフォルニア州パークレーに暮らす5人家族のツジムラ一家が、日系人仲間と強い友情で結ばれながら、支えあって生きる姿は、第1作の『壺』に印象的に描かれていた。第2作、『良いことに』において、ツジムラ一家が友情の手を差し伸べようとする相手は東パークレーで農家を営むハ

タ家である。ハタ家の黒柱であったハタが病気で他界し、残されたハタお婆さんと二人の息子の行く末を案じながら、ツジムラー家がハタの49日の法要に出かける場面からこの物語が始まる。

第1作より一つ歳をとって12歳になったリンコは、「変人」と言われているハタお婆さんが好きになれず、49日の法要にも嫌々出かける。生前、ハタは、夏にはきゅうりを売り、その他の季節には裕福な白人に仕え、庭仕事や雑用をして生計を立てていた。ツジムラー家は、法要の後で、きゅうり摘みを手伝い、ハタ家の暮らしの逼迫した状況を実感する。リンコの母は、重要な提案を夕食のテーブルで出す癖があるのだが、法要に出かけた日の夜、リンコを夏休みの間ハタ家へ手伝いに行かせる、と宣言しリンコを驚かす。リンコは必死で「行きたくない」と抵抗するが、両親は、ハタお婆さんは、誰か話し相手が欲しいのだからとリンコを諭す。リンコは、ハタ家がひどく貧乏で電話さえなく、ハタお婆さんが「変人」であるから、「行かせないで」と嘆願するのだが、結局、一人でハタ家に滞在し夏休みを過ごすことになる。

ハタ家は、今にも壊れてしまいそうな古い家で、電話・ラジオ・冷蔵庫と当時のアメリカ社会では、誰もが所有しているようなものを一切持っていない。時計もないので、時間は近くを走る鉄道の往来で知るといふ、リンコが滞在を拒むこともうなずけるような貧しい家庭であった。やがて、リンコはハタお婆さんからいろいろな話を聞く。ハタお婆さんは、日本に実母がいるのだが、彼女は子供を10人も産み、百姓仕事のために40歳のときには、腰が曲がっていたという。その実母は、ハタお婆さんに同じような苦勞をさせたくないと思い、「写真花嫁」として、娘をアメリカに渡らせたのだということがわかる。

ハタお婆さんが、リンコに当時の結婚のいきさつを語る。ハタおじさんは、「銀行マン」だと言われていたのだが、実際は銀行の清掃員であった。この逸話は、当時の「写真花嫁」が多かれ少なかれ体験した、夢と現実のギャップの深さを表している。やがて、ハタおじさんは銀行の仕事からも解雇され、二人は農業を始める。当時二人の間に生まれたテルという長女は、野良仕事が忙しく育てることができなかったために、ハタお婆さんは、日本の実母へ養育を依頼して、テルを日本へ送る。テルは19歳になっており、お婆さんは、金を貯めてテルを呼び戻すことを夢見ている。

ある朝、ハタお婆さんの次男で8歳のAbuが、近所を走る汽車に飛び乗り飛び降りる、という遊びに失敗をして、右腕を汽車に轢かれてしまう。その上、お婆さんが病院でアブに付き添っている間に、ハタ家の唯一の財産であり、摘んだきゅうりを売る仕事には必需品であるトラックを盗まれる。お婆さんは、家で長男のZenny(10歳)やリンコたちと心配しながら留守番をしていた、裏庭の小屋に居候するヤマナカの前で、「もう終わりだわ、もう終わり」と絶望的につぶやく。

アブの入院する病院に、リンコの両親や教会の牧師も見舞に駆けつけて、盗まれたトラックについて話しあう。この頃には、ハタお婆さんのところに来るのを渋り「2週間だけなら」と言っていたリンコが、「戻ってくるか」と聞く両親に対して、「今帰るわけには行かない」と答える。そして、リンコは、“...I'd grown to like Auntie Hata. In fact, I liked her a lot.”²⁾と語り、読者にお婆さんを好きになったことを打ち明ける。

1) リンコの成長——「死」という概念の芽生え

第1作『塚』におけるリンコは、身近な人の死を体験していない。しかし、第2作の『良いことに』では、冒頭から、ハタおじさんの49日の葬儀に出かけることから、死という概念がリンコの心に芽生える。実際、リンコはダイヤモンドのように輝く夜空の星の下で、ハタ家のドラム缶の風呂に入ったとき、いつも地味で決して着飾ることのないリンコの母が、「小さなダイヤの指輪が欲しい」とつぶやいたことに驚いた自分のことを思いだす。そのとき、母は「自分が死んだ後の形見としてリンコに残したいから指輪が欲しいのだ」と説明し、リンコは「ママは死んだりしない」と言っておきながら、心の中では、「いつかママも死ぬ、ハタおじさんのように」と思ったことを読者に

語る場面がある。

ハタおぼさんの長男のゼニーが、ハタおじさんや、ハタ家の2歳でジフテリアで死んだ娘や、生まれて間もなくしょう紅熱で死んだ娘の幽霊がハタ家の周りには出るのだとリンコを脅す。そして、リンコもこの人里離れた田舎のハタ家で暮らし始めてから、「幽霊」の存在を信じれるような気になる。このようなリンコであるから、ある真夜中、ハタおぼさんが熱心にハタおじさんの写真の前で、国から生活保護を受けるべきか否かの相談をしているのを見て、最初は幽霊が出たのだと思う。そして、リンコは、「福祉なんか頼らないで。私の両親がおぼさんを助けてあげるよ」と突然言うために、誰も周りにいないと思っていたおぼさんを驚かす。このとき、リンコは、おぼさんに「おじさんが言えて、言ったような気がした」と答えることから、死者の存在が彼女に身近になっていることが示されている。そして、『良いことに』の最終場面では、リンコは自分が「巫女で死人と対話ができることを知った」と家族に告げさえる。家族の誰もがこのようなことを言うリンコを相手にしないのだが、彼女一人、「ハタおじさんの霊があ晩家の中にいて、私を通じておぼさんに話かけた」と信じるのである。

2) 日本人や日系人への差別

第1作『壘』では、スターという白人アメリカ人が、リンコ一家を「日本人」であるというだけで強烈に差別し、様々な迫害をしてきたことを述べたが、『良いことに』においても、同様に白人たちからの差別が描かれている。ハタ家では、早朝に近くを走る鉄道の古いまくら木を拾うことが日課になっているが、ある日、ハタおぼさんの二人の息子が、白人から「オイ、そこらのまくら木はお前等みたいなチビジャップが担ぐには大きすぎるぜ」(45)と言われる。長男のゼニーが、拳を丸めて顎を突き出し「おれたちがここに先に来てるんだから、これらのまくら木はおれたちのだ」と勇敢に立ち向かうのを見て、リンコは驚く。そして、二人の息子のことを見ていてくれと、おぼさんから頼まれたことを思いおこし、リンコも勇気を振り絞り「彼らに手をあげないで」と叫ぶ。

しかし、3人の子供では、大男の白人に勝てるわけではなく、窮地に陥る。そこへ、救世主のように登場するのが、ハタ家の裏庭の納屋で暮らすヤマナカである。彼は、180センチ近くある長身の白髪を短く切った「微笑むことを忘れてしまった」かに見える厳しい表情の日本人であった。ヤマナカは白人の大男を地面になぎ倒し、大男が逃げ去って行くのを見てリンコは感動する。リンコは自分からヤマナカに自己紹介するのだが、彼は軽くなずくだけで、愛想が悪い。このとき、リンコは学校で自分を無視する白人の女の子たちのことを思い起こすことから、『壘』で語られていたようなリンコへの差別は相変わらず行われていることがわかる。リンコは、ヤマナカがリンコと距離を置いて接したいと望んでいるように感じ、自分もそういうときがあると読者に言う。そして、

“I never talk first to a white person because I might be ignored, and that really hurts.” (48)と語ることから、彼女が、白人たちから無視されるとき、深く傷ついていることが指摘されている。

このようなリンコは、自分を「5面性」のある人間だと分析する。弟のジョージの前では、「嫌な奴でえばって」両親の前では「頑固で強情」、隣人のやさしい白人、Mrs. Sugarの前では「元気で可愛い」、そしてひどくいじめられたときには、日本に帰国した母の妹、ワカおぼさんに教えられたように「強く勇敢」になろうとしていると語る。しかし、リンコは、「問題は、そんなふうに勇敢であり続けることはできないこと」(52)と言い、自分について次のように述べる。

……The minute I get to school, I am Rinko, the meek and mild, and I don't like myself much when I'm like that. In fact, I never feel like my own true self at school. But sometimes I'm not exactly sure which is the real true me.(52)

ここには、いつも明るく元気なリンコが、差別されている学校では、おとなしく目立たないように気を使っていることがわかる。したがって、学校では、本当の自分ではないと感じるのだが、いつも使いわけをしているために、自分自身でもどのような自分が「自分らしい」のわからなくなってしまうと言う。ここには、自己が日本人とアメリカ人という狭間で、常にアイデンティティに揺れる日系人二世の抱える問題が、リンコの姿を通じて示されていると思われる。

第2作『良いことに』において、日系人たちの前に「敵」として登場する白人は、アブの入院した病院からハタ家に派遣されて来る、国の福祉事務所属員である Mrs. Saunders である。サンダース夫人は、ハタおばさんに、「これからどうやって生活していくつもりなのか」と詰問して迫る。数日後、彼女は再訪してきて、「国から生活保護を受けるよう」に薦め、手続きの書類にサインをするように促す。「名前をサインできない場合は、Xとでもサインしておいて」とおばさんを侮蔑するような調子で言うサンダース夫人に対して、ハタおばさんは背筋を伸ばし、着ているものの皺をととのえて「きちんとサインはできますが、でも、私はサインしません」とたどたどしい英語ではあるが、きっぱりと答える。ある真夜中に、他界した夫の写真の前で夫に話しかけたとき、夫の声を聴いたように感じ、リンコとも話し合ったハタおばさんは、「私の夫が私だけで家族の世話ができると言ってくれましたから」と明言する。そのため、サンダース夫人は、おばさんの固い意思の前では、どうすることもできずに、その場を立ち去るのである。

さらに、リンコの両親が、教会の男子寮で賄いや清掃をしてくれる人を探していて、寮に暮らしている男たちが、金をだしあって給料を出すという話をハタおばさんに紹介する。日本料理しか作れず、英語も上手に話せないハタおばさんにとっては、最適の仕事であった。こうして、おばさんは、サンダース夫人が勧めるような国の援助を受けなくても、二人の息子と生きていくことができるようになる。

3) リンコの成長への過程

第1作『塚』において、母親の妹のワカおばさんに影響されて、リンコは、同級生から無視されることがあっても、勇気を持って対処していこうと決意し、成長の兆しが見えたことは述べた。このようなリンコであるから、第2作『良いことに』では、冷酷そうな福祉委員のサンダース夫人に対しても、英語が上手に話せず困惑するハタおばさんに代わって、敢然と立ち向かう。このときの自分自身を、“So I gathered up my courage and became the strong, brave person I like to be.” (92)と分析するリンコである。このように、彼女は「強く、勇敢な人」になりたいと望んでいるのだ。

『塚』においては、ワカおばさん、そして、『良いことに』においては、ハタおばさんが、リンコの成長に影響を与えてくれる人物である。すでに述べたように、ハタおばさんは、ある日の真夜中、先立たれた夫の写真の前で、「福祉事務所の世話にはなりたくない」「私自身で家族を守りたい」「日本にいつか行って娘のテルに会い、またアメリカに二人で戻ってきたい」と訴えながら「パパ、一体全体どうしよう」と悩みを打ち明ける。これを聴いたリンコが、その後おばさんの良き相談相手になっておばさんのために奔走するようになるのである。

『良いことに』では、ハタおばさんの他に、違法移民のヤマナカもリンコの成長に影響を与える人物である。ある日、怪我をして入院していたアブが退院することになり、リンコは大喜びでヤマナカに知らせに行くのだが、彼は置手紙を残して日本に去った後だった。サンダース夫人が訪問したことから、自分の身の安全が危ぶまれることもあろうかと、帰ることを決めたのだ。手紙には、「金持ちになって日本に帰国することはそれほど大事ではないとわかった。俺の威厳や誇りが壊されることのないうちに帰国することの方が重要なのだ」とあった。この「威厳」(dignity)「誇り」(pride)という言葉はウチダの作品で、日本人や日系人たちを形容するときに使用されるキーワー

ドである。

ウチダは、アメリカで暮らす日本人、特にウチダの両親のような一世の人たちを称えるとき、これらの言葉を用いる。ヤマナカは、ハタおばさんに「勇気を持ってください。福祉の人たちから、あなたの誇りや魂が抜き取られないように」という言葉を残して去る。このように誇りや威厳を失ってはいけないというヤマナカの言葉は、この作品の時代設定の数年後に日系人たちが強制収容所に送られたことを考えれば、余計に読者の胸を打つだろう。

ヤマナカが去ってしまった後、リンコは、ハタ家にやってきて間もない頃に、自分も汽車へ飛び乗り飛び降りる遊びで怪我をしたこと、アブが怪我をしたこと、ハタおばさんのトラックが盗まれたこと、福祉委員がやって来たこと、そして、ヤマナカが去って行ったことを列挙しながら、5つめの「悪いこと」が起きてしまったと嘆く。しかし、このとき、ハタおばさんは、人が「悪いこと」だと思うことは、少しも悪いわけではなく、しかも「良いこと」に変わっていくこともたまにはあるのだと、リンコを諭す。

そして、このおばさんの言葉が本当であることを、リンコにわかる 때가来る。夏休みが始まった頃、リンコは「変人」と噂されるハタおばさんの家に手伝いに行くことをひどく嫌がって、両親に「行きたくない」と訴えた。しかし、おばさんの家で夏休みを過ごし、様々なことを体験したリンコは、リンコを迎えにきた弟のジョージに、「ハタおばさんは、頭がおかしいなんてことは全くない。それどころか彼女は勇敢な女性 [a brave lady] よ」と言う。夏休みも終わり、リンコはハタおばさんに別れを告げ、帰りの車の中で、ジョージに次のように語る。本作品の“the best bad thing”「悪いことが良いことに」というタイトルはここから採択されたものである。

…Bad things aren't always bad. Sometimes they turn out to be good… Like going to Auntie Hata's, … It was the best bad thing that ever happened to me. (120)

このようにして、夏休みの最初にハタおばさんのところへ行くことを嫌がっていたリンコは、おばさんと過ごした夏に多くのことを学び、一段と大人への道を歩み始める。

4) 日本の風習や香り

第1作『塚』においては、リンコ一家が、さまざまな日本的な習慣をアメリカの暮らしにおいても守り続けていることを述べた。『良いことに』では、ヤマナカの作る数多くの色鮮やかな日本の風の描写が、最も日本的なものとして読者の心をとらえる。リンコは、これらの風がいっぱいにあふれているヤマナカの住む納屋に入ったとき、「万華鏡」の中に足を踏み入れたようだと述べている。

そして、『塚』を論じた折に、リンコものが青少年向けの作品でありながらも、大人の読者の心をつかむような詩的な描写に満ちていることは指摘した。同じように、第2作『良いことに』においてもそのような場面が散りばめられている。貧乏なハタ家に滞在することに不満であったリンコが、ハタ家の家族の一員となることの洗礼のように思える箇所は、ハタおばさんが、リンコのために野外に設置してくれる簡易露天風呂と呼べるようなドラム缶での入浴場面である。夜空には満天の星が輝き、入浴しながら夜空を見上げるリンコが、「誰かが、巨大な真っ黒の鉢に手いっぱいダイヤモンドを撒いたよう」だと感じる場面が読者の胸を打つ。

さらに、ヤマナカがある日の夕方、手製の色鮮やかな風を持ってきて、風あげに誘ってくれるとき、リンコが大喜びする場面がある。蝶々型の風を揚げているリンコは次のような思いにとらわれたと述べる。

…I really felt as though I was the butterfly up there and it was me flying in the sky. I felt like I was part of the sky and part of the entire universe and I guessed that included the spirit world as well. (88)

ここでは、ハタ一家に次々に起きる不幸な出来事のために落ちこんでいたリンコが、夢中になって凧上げを楽しんでいる様子と、リンコが、自然に囲まれたハタ家の環境の中で感じだした「幽霊」の存在について述べられている。そして、これらの美しい凧は、ヤマナカによって次のように説明され、『良いことに』を、青少年向けという枠を超えた深みのある文学作品にしていると言える。

“You know, a kite is an extention of life,” he said, as though he were talking to the samurai on his kite. “It lets you become part of the sky. You become the kite and the sky and the universe itself, and then we are all one and the same.” (60)
(下線、筆者)

ここに引用したヤマナカの言葉の「みんな、一つになって同じになる」という箇所は、作者ウチダの日系人への差別に対する静かな抵抗の言葉になっているようにも思われ、重要なメッセージを伝える一節としての役割を果たしているのではないだろうか。

II. *The Happiest Ending* (1985) 『最も幸福な結末』

リンコ三部作の最終版にあたる本作品の最終部において、リンコの兄の Cal が、リンコの成長が成し遂げられたことを、明確な言葉で述べる。そのため、この作品をもってリンコの成長が完結されたと考えられるだろう。第1作で11歳であったリンコは12歳半になっている。第2作『良いことに』では、リンコの夏休み中に起きたことが描かれていたが、第3作は、同じ年のクリスマスの頃に起きたことが述べられているので、第2作から第3作への移行時間は、約半年間の経過が見られるということになる。

第3作『結末』においても、作品の全体的な印象として、前2作同様に、日本的な香りが散りばめられていることがあげられる。第1作『曇』には、ツジムラー一家の食生活が日本食を中心に行っていることが述べられたが、第2作『良いことに』では、主に、ヤマナカの作る凧が日本的なものを象徴していた。第3作『結末』では、最終場面におけるハタおばさん主催のクリスマスパーティで、テーブルに並べられる寿司や船盛りの刺身などの食事に関する細かい描写に表れている。

そして、3作品ともに、日系人社会における強い絆についての言及があることが印象深い。第1作においては、ツジムラー一家と親戚のように親しく交際するカンダが、必死に貯蓄してきた500ドルという大金を、リンコの父の修理工場開設資金として差し出すことに描かれていた。第2作では、リンコの両親が夫を病気で失ったハタおばさんを献身的に世話する。また、ハタおばさんは、裏庭の納屋に居候する不法移民のヤマナカをかくまう。最終の第3作では、リンコの日本語の家庭教師であるスギノ夫人の夫が、スギノ家に下宿するヒガの長年貯蓄していた、日本へ帰国するための費用1,500ドルを使いこんでしまうとき、近隣の日系人が寄付金を出し合ったり、同じ下宿人のキンジョーが、ハタおばさんの日本から呼び寄せた長女テルとの結婚費用をすべて差し出して結婚を延期するということなどに描かれている。

1) リンコのアイデンティティ——アメリカ人としてのリンコ

日系アメリカ人に対する差別は、前2作においても描かれていたが、本作品では、冒頭から、リ

ンコが日常的に差別を受けているにもかかわらず、他のアメリカ白人と同様にアメリカ人でありたいと願う姿が紹介されている。一世で日本人であるリンコの母親は、リンコが嫌がるにもかかわらず、放課後毎日日本語学校に通わせようとする。リンコは、“It makes me feel like a foreigner… and I’m not!”³⁾と抵抗する。さらに、リンコは、自分自身の日本人の顔、黒髪、大きくない目を嘆き、先生たちも正確に発音できないリンコ・ツジムラという名前さえ嫌なのだと、読者に訴える。

母親は、リンコや兄のカル、弟のジョージに「あなたたちは、アメリカ人であり、日本人なのよ」と言い聞かせ、彼らに日本語を習わせている。ある日、リンコは、身体が細く丈夫ではないことが理由になり、毎日日本語学校に行かなくてすむようになる。しかし、母は、スギノ夫人のところへ週末にリンコを通わせて、夫人に日本語の家庭教師を引きうけて欲しいと依頼する。この日本語教育という観点に対する対立にも、一世の母と二世の娘との間で「日本語」に対して異なった感情があることが示唆されており、ウチダや他の日系二世作家が繰り返し述べている一世と二世間における心の葛藤が、ツジムラ家のような理想的な家庭においても描かれている。実際、多くの二世がリンコのように「日本語学校へ行かせようとする親に反抗した」と Elaine H. Kim も指摘している。⁴⁾

一方では、一世であり、日本人でありながらも、二世の娘リンコと同じくらいにアメリカをこよなく愛する人物としての、リンコの父がいる。そんな父をリンコは、「とても愛国的」と形容し、アメリカ人であろうとしている父の姿が提示されている。その証拠として、彼は7月4日のアメリカ独立記念日や11月11日の第1次世界大戦休戦記念日には、アメリカ国旗を玄関前に掲げ、うれしそうに国旗を掲揚するのが常である。長編『写真花嫁』の主人公ハナの夫もまた、大変に愛国的な人物であったが、突然の強制収容所暮らしの中で気力を無くしていく。彼は、廃人のように収容所の鉄格子のまわりをうろつき、砂漠に埋もれた遺跡を拾っているところを脱走者と誤解されて、銃で撃たれて死んでしまう。数年後には、リンコの一家にもまた、そのようなときが来ることを思えば、読者は、アメリカへの愛国心を強く抱いているリンコの父の姿に忍び寄る暗い影を想像する。

実際、1930年代を舞台にするリンコものに「収容所」のことが少しも描かれていないことから、読者は、アメリカ白人からの様々な差別にもかかわらず、決して希望を捨てずに前向きに生きようとした日系人たちの姿により一層心を打たれるのである。

2) 日本人と日系人への差別

このように、リンコはアメリカ人になりたいと願い、父はアメリカへの愛国心に燃えているのはあるが、アメリカという国は、彼等の国を思う気持ちを理解してくれることはない。そして、アメリカ白人からの日本人や日系人への差別は、前2作と同様に、この最終作においても描かれ続ける。

11月の感謝祭の日に、ツジムラ一家は、怪我をして腕が不自由になってしまったスギノ夫人を助けようと、スギノ家を訪れ下宿人たちと皆で感謝祭を祝うことにする。祝宴の始まる前にリンコは、下宿人のキンジョーと下宿仲間のジョニーの話を耳にする。ジョニーは東京から来ていて、エンジニアになるためにアメリカの大学で勉強をしている。ジョニーは、「僕は、アメリカにいても、未来がないように思える」とキンジョーに訴えている。実際、二世は高校や大学を卒業しても、日系コミュニティの外で職を見つけるのは難しかった（キム、170）。しかし、キンジョーは、「確かに、アメリカは、我々が夢見ていた約束の地ではないかもしれないが、それでも俺はこの国で家庭を築きたい」と答える。ジョニーは次のように言って反撥し、それに対してキンジョーは次のように答える。

… “You’ll always be an outsider here, Kinjo. You know that, don’t you? You’ll

always be a foreigner since the law won't allow Asians to become citizens.”

Mr. Kinjo sighed. “Well, maybe not now,” he said. “But I have hope[sic.] things will change someday. I’m staking my future on this country.” (59)

確かに、ジョニーが言っているように、リンコものの時代設定は1930年代であることから、一世はアメリカ市民にはなれなかった。そして、アメリカで産まれた二世はアメリカ国籍をとれたものの、1941年の日本軍による真珠湾奇襲によって、1942年の2月、フランクリン・ルーズベルト大統領による行政命令 9066号が発令され、太平洋沿岸に住む約12万人の日本人や日系人が10の強制収容所に送られることになる。この歴史的事実を考慮すると、キンジョーの望む「差別のないアメリカの到来」は、簡単に実現することはない。

3) リンコの計画と写真花嫁

このスギノ夫人宅に下宿するキンジョーが、ある日、リンコに、教会の独身寮で働いているハタおばさんが、いつもリンコの話をしていて、リンコを“summer daughter”と呼んでいると伝えるので、彼女はうれしく思う。しかし、このハンサムではなく、歳も取っているキンジョーが、ハタおばさんの19歳になる長女のテルを日本から呼び寄せて結婚するとリンコに告げると、彼女は、「おじさんは、歳をとりすぎている！」と叫んで反対してしまう。リンコは、親子ほど年齢差のある二人は結婚すべきではないと考える。さらに、彼女は、前述したように、第2作『良いことに』において、ハタおじさんの霊の力でおばさんを助けることができたと思っていたことから、ここでも、おじさんの霊が「テルを助けてやってくれ」と訴えているように感じ、テルがキンジョーとは結婚しないように作戦をたてる決心をする。

このキンジョーとの会話から、1週間が過ぎ、リンコは再びスギノ夫人宅に日本語を習いに行く。リンコは、ハタおばさんが独身寮で働く教会に寄り道をして、テルとキンジョーが結婚しないようにと訴えに行く。しかし、リンコの思惑とは逆に、おばさんは、その夜、二人の結婚を祝う会があるとうれしそうに言う。そのため、リンコが思いきって、テルにはもっと若い男性がふさわしいのだと伝えると、おばさんは、「若い人は、嫁を呼び寄せるような経済力はない」「キンジョーは、長年かかって貯蓄し、ようやく結婚が可能になった」とリンコを説得する。リンコがさらに「人は愛があるから、結婚するんでしょ」と問いかけると、ハタおばさんは次のように答える。

… Love will come later, Rinko. Like it did for so many of us who came from Japan to marry men we knew only by photographs… Marriage isn't all love and romance, Rinko. (47)

ここには、ハタおばさんの自分自身をも含む「写真花嫁」たちの実情が述べられている。⁵⁾日本人や日系人たちの、アメリカ白人とは異質の結婚観については、例えば、Sylvia Junko Yanagisakoが、「伝統的な日本の結婚は、義理に基づいていて、夫婦はロマンチックな愛より義務感で結びついている」と述べている。⁶⁾ヤナギサコもハタおばさんの言うように「愛情は結婚生活を続けていくうちに芽生える」と説明している。しかし、写真花嫁の場合は、状況はさらに悪く、夢を抱いて日本から海を越えてやってきた花嫁たちは、「夫に会ってひどい衝撃を受けた」という。⁷⁾ウチダも大人向けの長編『写真花嫁』では、主人公の写真花嫁ハナが誠実ではあっても魅力的ではない夫に満足できずに若い男性と激しい恋に陥る姿を描いている。実際、ハタおばさんやハナが生きた時代には、夫以外の男性と駆け落ちする女性が多かったようである（イチオカ、188～189）。

写真花嫁たちの夢が破れた不幸な結果については、この最終作品では、リンコの日本語教師であ

るスギノ夫人を通して描かれている。ある日、リンコの前でスギノ夫人が突然泣き出したために、リンコが驚き、どうしたのかと訪ねる。すると、夫人は、リンコに「信頼できるような人と結婚できるよう祈る」と言うので、リンコは「スギノさんは、そうではないの？」と聞く。そして、夫人は、夫が、最初から自分自身よりも若くてハンサムな、全く別人の男の写真を自分自身であると偽って送ってきたと答えながら、初めから信用できない男であったとつぶやく場面がある。

スギノは、酒に溺れ、ギャンブル好きで花札や競馬・競輪にのめり込み、金を使い果してしまうような男であった。やがて、スギノは下宿人のヒガが日本への帰国費用として貯めていた1,500ドルを「2倍にして返す」と約束してとりあげ、結局ギャンブルで全て失ってしまう。スギノ夫人は、夫に愛想を尽かし、彼を追いつ出す。リンコは、“I felt proud of Mrs. S for being strong and brave and getting rid of her skunk—husband” (88)と一世女性の意志の強さをたたえる。このように、リンコは、夫人を「強く」「勇敢」と形容するが、これらの言葉は、作者ウチダが一世の中でも特に写真花嫁の女性たちの勇気を称えるときに繰り返して使う表現である。そして、リンコは、スギノ夫人が自分の前で夫への憎しみを暴露したことに対しては、自分が子供としてではなく、「真の友」として扱ってもらっているのだと喜ぶ。こうして、スギノ夫人の「友」になれたリンコの成長はさらに続く。

4) リンコの成長

スギノ家で催された感謝祭の祝宴のとき、リンコは、キンジョーを避けていたのだが、キンジョーの方からリンコに話しかけてくる。リンコがテルとの結婚を許したくないと考えていることを知っているキンジョーは、自分がいつまでも白人のための庭師では終わらないこと、自分自身の苗木畑を持ち、カーネーションやバラを造る名人になり、この国で認めてもらうという決心を語り、テルも自分を尊敬してくれるようになる日が来るだろうとリンコに述べる。それでも、リンコは、テルがキンジョーと結婚することで幸福になれるとは思えず、ハンサムな青年のジョニーこそがテルにふさわしいと考える。

やがてテルがアメリカにやってくる。最上の着物を着たテルは、日本人形のような肌の美しい女性であった。リンコは、映画俳優や王子様のように思えるジョニーと人形のようなテルが「完璧なカップルだ」と確信する。テルはまた、女学校を卒業していて、リンコと英語で話すこともできる知的な女性でもあった。リンコは思いきってテルに、キンジョーではなくジョニーと結婚して欲しいと頼む。しかし、テルはリンコの言葉に当惑し、キンジョーとは数ヶ月も文通してきたことを伝え、彼が「良い人だから婚約した」と諭す。リンコは、テルが自分を子供扱いしているように感じて不満を抱く。

一方、スギノが下宿人の金を使いこみしたあと、近隣地域の日系人共同体では、皆で協力して金を出し合おうという計画をたてる。しかし、どの家も貧しく、生活に追われていて思うように金は集まらなかった。そのようなとき、ハタがこのような気持ちが落ち込むような状況から皆を救おうと、日本からやってきた娘のテルと婚約者のキンジョーの婚約祝いを兼ねて、クリスマスパーティを開催する。そして、このパーティの席上でリンコの成長が完遂されたことを示唆するような場面が用意されている。

まず、パーティで、リンコが騒がしくはしゃぎまわる弟たちの側にいつものように座ろうとするとハタおばさんが、「こっちに来て座りなさい」と大人たちの座る席に呼んでくれる。次に、リンコの父が祝宴のスピーチを始めると、リンコより年下の弟たちは、皆、その場を離れて遊びに行こうとする。リンコも今まではずっと弟たちと同じように行動していたのだが、今回は大人たちと一緒にパーティ会場に残る。

そして、リンコの成長は突然やってくる。父と娘ほどに年齢差があるキンジョーとテルの結婚に

は、一人絶対反対の立場をとっていたリンコであったが、パーティの席上で、キンジョーがテルとの結婚費用を全てヒガに差し出し、テルが美しい表情で微笑み、キンジョーに「あなたは、本当にやさしくて良い人ね」と言っているのを見る。この瞬間、リンコは、「自分で造っていた壁に囲まれた場所から誰かが突然引き出してくれて、物が良く見えるようになった」ように感じる。このとき、リンコは、キンジョーがテルにとって最もふさわしい人なのだと悟る。

さらに、リンコがもう一つ悟ったことがある。それは、テルの第一印象を「可愛い日本人形」としたことはまちがいであったということである。彼女は「人形などではなく、生身の女性で、ギャンプル強の夫を追い出したスギノ夫人や、夫に先立たれながらも息子二人と逞しく生きるハタおばさんや、ツジムラ家をしきるリンコの母親と同じように意志の強い人なのだ」とわかる。リンコはハンサムなジョニーと結婚させて、テルを幸福にしようと奔走したのであるが、テルが自分自身で「最も幸福な結末」を迎えたのだと納得する。リンコものの最終作品である本作品のタイトルは、このようなテルの状況を説明している言葉から採択されている。

そして、今までは、自分の非を認めようとはせず、自分勝手に強情なところもある、わがままな女の子になりがちなリンコであったが、この最終作品では、キンジョーに「私が悪かった。ごめんなさい」とはっきり言い、しかも、このように以前とは変化した自分自身に驚くのだ。リンコは、このときの自分を“*It was a great revelation to hear myself, because I didn't think I could ever say those words.*” (110)と述べる。キンジョーは、リンコがはっきり謝ってくれたことを喜び、「これからは、友達でいようね」と言う。さらに、リンコは、スギノ夫人からも「あなたが、私がどんなに幸福で自由に感じているかを一番わかってくれていると思うわ」と、一人の大人として扱ってくれているような言葉をかけられる。

クリスマスパーティの会場で、このようなリンコの姿を眺めていた、大学生の兄のカルが“*I do believe you're finally growing up.*” (下線、筆者) (111)と言う。こうして、兄の言葉を通して、主人公リンコの成長が完遂したことが確認されており、リンコ自身も“*I'd already discovered it myself*”と答えて、このリンコものの最終作品が閉じられる。

Ⅲ. ウチダとキリスト教

第1作『塚』において、隣人のシュガー夫人をはじめとする、リンコ一家に対して親切でやさしい白人の存在について述べ、ウチダの作品には必ずこのような日系人差別をしない寛容な白人が登場すること、そして、このことはおそらくウチダのキリスト教信仰が関係していることは指摘した。そして、同様のことが、第2作『良いことに』においても言えるだろう。アブが怪我をしてハタおばさんが病院で付き添わなければならなくなり、リンコとゼニーがヤマナカの職場であるイーグル・カフェを訪ねる。ヤマナカは、泣きながら状況を説明するリンコたちの心を落ちつかせ、特別に食事を作ってくれる。そして、店を出るとき、その金をオーナーのSabatiniに支払おうとすると、「そんなものいらないよ、店のおごりだ」と言ってくれる。名前からしてイタリア系であるようだが、リンコたちにやさしく接してくれる白人の一人であるといえよう。

作者ウチダが同志社大学出身でキリスト教の敬虔な信者である両親に育てられ、彼女もまた強いキリスト教の信仰に支えられていることは、長編『写真花嫁』についての拙論で述べた。リンコものにおいても、3作品ともに、リンコの母がキリスト教の熱心な信者で教会にも欠かさず通っていて、毎回の食事時には神への感謝の祈りを捧げてから食事を始めるという習慣になっていることが記されている。そのため、彼女の友愛の精神は人一倍強く、3人の子どもたちも母の影響を受けている。最終作品である『結末』においては、母親の持つキリスト教精神が、子供たちにも伝えられていることが、スギノが下宿人ヒガの金を使いこんでしまった事件後の、彼らのクリスマスの過ご

し方に表れている。

リンコは、“…Christmas was very different at our house this year.” (99)と言うのだが、リンコ、兄のカル、弟のジョージは、毎年恒例のクリスマスプレゼントの交換を中止し、クリスマスツリーを飾ることもやめて、その代わりにすべてを、父がヒガのために集めている寄付金にまわすことにする。これは、母のように彼らもまた友愛の精神を持っていることを示すものである。実際、リンコは最も大切にしている「大学入学のための貯金箱」に入っている金からも寄付することさえ申し出るのである。

ウチダは、拙論でも述べてきたように、同時代の他の二世作家と違って、激しい調子でアメリカ人たちによる日系人への人種差別を攻撃することはない。これは、ウチダが両親同様に深いキリスト教の信仰に支えられて生きていたために、他人の過ちを許すという姿勢に貫かれた精神を持っているからであろう。長編『写真花嫁』に関する拙論でも言及したウチダの「他人の過ちを許す」という姿勢は、リンコものの最終作品『結末』において、リンコがテルに、ハタおばさんが、テルを小さいときに日本の祖父母に育てるように日本へ送ったことについて、「悲しくはなかったの」と質問した折の、テルの答えに読み取ることができる。

When I was about your age, I was angry at my mama, even if I knew she only wanted the best for me…one day my grandmother said, “Teru, you can go on using your energy to be angry all your life and be a bitter, sour person. Or you can accept your life as it is and enjoy it.” … and one day, I just stopped being angry and decided to accept who I was. Do you understand? (78-79) (下線、筆者)

このテルのせりふにウチダの人生観が表れているように思える。「一生怒り続けて、嫌な人間」であることをやめて、「現実を受け入れて肯定的に生きよう」としたテルの姿にウチダの生きかたが重なる。さらにテルは「19年間私は良い日本人だったけど、今生まれ故郷に戻ってきたのだから、良いアメリカ人になるわ」と言う。ここには、日本人でありアメリカ人でもある日系人のアイデンティティが理想的に融合する生きかたのようなものが示唆されているのではないだろうか。

最後に、ウチダが、リンコに影響を及ぼす重要な人物として、ワカ・ハタおばさん・テルという3人の日本人女性を選んだことについて一言述べたい。ウチダは、生涯独身を通し、キリスト教の信仰に支えられながら、日系人作家として差別に声高に反発するようなことはなく、寛容な白人を常に作品に登場させて、作品を描いたことはすでに述べた。一方で、女性作家としてのウチダが、リンコものにおいて、女性たちに重要な役割を与え、長編『写真花嫁』でも勇敢な女性たちの姿を生き生きと描いている。このことは、ウチダが、当時では周辺に追いやられていたマイノリティとしての女性に光を当てて、女権運動の隆盛に一役買おうとしていたように思われ興味深い。

注

- 1) 賞については、拙論「リンコ・ツジムラの成長物語(1): ヨシコ・ウチダの『夢をかなえる壺』」『東京成徳短期大学紀要』第35号(2002) 67-79を参照。本稿で取り扱う『悪いことが良いことに』は、女優樹木希林がハタおばさん役を演じてテレビ映画化された。日本でも放映され、好評だったことは記憶に新しい。
- 2) Yoshiko Uchida, *The Best Bad Thing* (New York: Aladdin Paperbacks, 1983), 83. 以後、引用は()の中に頁数を記す。日本語訳は拙訳である。
- 3) Yoshiko Uchida, *The Happiest Ending* (New York: A Margaret K. McElderry Book, 1985), 4. 以後、

引用は（ ）の中に頁数を記す。日本語訳は拙訳である。

- 4) Elaine H. Kim, *Asian American Literature, An Introduction to the Writings and Their Social Context* (Philadelphia: Temple UP, 1982), 邦訳, 166。(『アジア系アメリカ文学[作品とその社会的枠組]』植木照代・山本秀行・申幸月訳 世界思想社 2002年)以後, 同書からの引用は, ()の中に作者名と, 邦訳本の頁数を記す。
- 5) 「写真花嫁」については, 拙論「受け入れることと許すこと——ヨシコ・ウチダの『写真花嫁』」『東京成徳短期大学紀要』第34号(2001)53-60頁を参照。
- 6) Sylvia Junko Yanagisako, *Transforming the Past: Tradition and Kinship among Japanese Americans*, (Stanford: Stanford UP, 1985), 96-97.
- 7) Yuji Ichioka, *The Issei; The World of the First Generation Japanese Immigrants, 1885-1924*. (New York: Free P, 1988), 邦訳(183-195頁参照)。(『一世: 黎明期アメリカ移民の物語』富田虎男他訳 刀水書房 1992年)以後, 同書からの引用は, ()の中に作者名と邦訳本の頁数を記す。